

## 実践報告

# 「拡張による学習」を目指した社会科授業づくりの研究 ー歴史的分野における一単元を事例にー

角田 梓\*

## Study of Making Classes of Social Study Aiming for "Learning by Expanding" in Junior High School: A Case of One Unit in the Historical Field

Azusa SUMIDA\*

## 【要約】

本校社会科では、生徒の市民的パフォーマンスを高めるために、実際の社会問題をもとに単元全体を通した課題を設定している。さらに、その解決に向けた具体的な学習活動として、主に議論を用いる。本研究では、周辺の参加から十全参加へ向かうために学校外部の他者（ラーニング・パートナー）との共同・協働を図った。ラーニング・パートナーとの共同・協働が、生徒の市民的パフォーマンスの高まりにつながったかを検証する。

## 【キーワード】

拡張による学習，二重の学習，正統的周辺参加

### 1 はじめに

次期中学校学習指導要領社会（案）は、社会科教育により「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」の育成をめざしている。この「形成者」を育成するためにこれまで行われてきた社会科学習は、地理・歴史・公民的分野の系統的な社会認識が多く、個人の知識や技能の習得を学習とするものが多かった。しかしこれからの学習は、学習を個人の内化とみるのではなく、学んだことを世界や仲間とつなげ共同・協働しながら新しい社会や価値を創造することを目指すべきであろう。

平成28年12月の「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（中教審答申）」では、内容の見直しの要点として「社会との関わりを意識して課題を追究したり解決したりする活動を重視する」ことが示された。従来、「適切な課題」として示されていた部分は「社会との関わりを意識した課題」となり、現代社会の諸課題を把握し追究、解決を図ることが明確に示された。さらには、「社会に開かれた教育課程の実現」に向けて「よりよい社会を創る」という目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくことが示されたことから、追究や解決の過程で専門家や関係諸機関と共同・協働する必要性がでてきたと言えよう。すなわち、国家や社会へ主体的に参画しようとする態度や、よりよい社会を構築するにあたり他者と協働し常に学び続けようとする生徒の育成が求められているのである。

このことから、本校では、主体的に集団に参加し、その集団及び社会共同体をよりよく構築するために適切に判断し行動しようとする力を高める学びについて改善を図っている。

### 2 市民的パフォーマンスを高める社会科授業

ジーン・レイヴ及びエティエンヌ・ウェンガーによれば、内化を超えて、複数の実践共同体へ参加し、その一員として貢献することを学習と呼ぶ。共同体は有能な参加者を得たことで発展し、学習者

\*佐賀大学教育学部附属中学校

はその共同体の一員としてのアイデンティティを形成していく中で、より「共同体の一員らしい振る舞い」ができるようになる。本校社会科では、よりよい社会を構築するために適切に判断し行動するといった「市民らしい振る舞い」を、市民的パフォーマンスと捉えている。

### (1) 正統的周辺参加論について

レイヴ及びウェンガーは、その著書『状況に埋め込まれた学習』において、次の状況学習論を示している。「状況に埋め込まれているという性質は、…知識や学習がそれぞれ関係的であること、意味が交渉で作られること、さらに学習活動が、そこに関与した人々にとって関心を持たれたものであることなどについての主張の基礎となるものである。…状況に埋め込まれていない学習はないということを意味している。」

すなわち、すべての行為や言葉は、互いのあるいはモノなどの相互行為によって成立し、状況が変われば同じ言葉でも意味やその価値が変わるということである。この相互作用は集団を維持・発展させるのであるが、乗り越えられない問題に直面した際、他の集団と共同し問題の解決を図る。このように、集団は常に変化しつつ、学習者は様々なそれに所属しながら、周辺参加（新参者）から十全参加（古参者）を果たすようになる（正統的周辺参加論）。この正統的周辺参加論をもとに、市民社会を学習に埋め込むこと、つまり実際の市民社会に参加する学びを行い、市民社会へアクセスさせることが必要であると考ええる。

### (2) 拡張による学習について

佐長は、エンゲストロームの「二重の学習」を「同時に複数の共同体へ参加すること」と述べている。さらには、エンゲストロームが言う二重の学習は「第1は学校共同体への参加、第2は学校外部の市民社会への参加との2つに言い換える」ことができるとし、これを「拡張による学習」としている。

「第1は、学校共同体への参加として、すぐれた学校的な学習者になることによって学校の発展に貢献する活動である。第2は、学校共同体の外部の市民社会の共同体への参加であり、児童・生徒は押さなくても一人の市民としてのアイデンティティを形成するように、市民社会の発展に貢献する活動である。」

佐長は、この二重の学習で重要なこととして、以下のことを述べている。

「社会科等の授業における学習を学校の中に閉じ込めないことである。…すなわち、学習の単位となる学級集団のチームワークから市民社会へのネットワークへと拡張することである。」

積極的に学校の外部のアクターである組織や集団とネットワークを結ぶ中で、新参者としての市民社会への正統的周辺参加を展開することを示している。

### (3) ラーニング・パートナー（LP）の定義

市民社会を学習に埋め込むことから、授業では実際の社会問題を取り扱う。様々な立場や価値が対立する問題を解決するべく生徒は議論するが、前述したように、集団は乗り越えられない問題に直面した際、他の集団と共同し問題の解決を図っていく。よって、生徒（新参者）の教室での学びに、市民共同体の古参者であるラーニング・パートナー（Learning Partner）との相互行為を組み込むこととする。

ラーニング・パートナー（LP）は、生徒に知識を「教える」「伝える」という従来のゲスト・ティーチャー（GT）とは意味合いが大きく異なる。

新参者（生徒）は、市民社会の共同体の先輩である古参者の言葉や行為から、知識や技能を獲得する。一方、古参者（LP）は、新参者を市民として育てるためにベテランとして振る舞うが、うまくいかないことが生じる。それを乗り越え、古参者は新参者に配慮し、つながりを保ちながら、自ら

の所属する集団を変化させていくのである。すなわち両者は新参者と古参者という異なる立場ではあるが、市民として共同体を維持・発展させていくという、共に学び合うパートナーである。このことから、共同体の古参者（従来のゲスト・ティーチャー）をLPと定義づけ、授業に組み込んでいくこととする。

## 2 実践事例の紹介

### (1) 単元名 中世社会の始まり（歴史的分野）

### (2) 研究対象となる学級

本単元では内容として、封建制度の成立と武家政治の特色を中心に扱う。生徒は小学校において、内容としては武家社会が成立したこと及びその仕組みについて既習しており、方法としては特定の人物を中心とした歴史の見方を学んでいる。そこで本単元では、まず中世初期の社会と現代社会を様々な視点から比較させる。次に視点のひとつとして「貧困」を設定し、中世初期の社会における貧しさが生じる過程を社会の仕組みから考察させる。このような、類似や差異などを考えることで歴史的な見方・考え方の成長を図りたい。さらに、現代の「貧困」問題の実態を知った上で、改善に向けて議論させる際、中世初期の日本の歴史からの学びを生かすことも視野に入りたい。

探究の方法としては、ディベートやパネルディスカッションといった議論を用いる。LPの専門家としての意見を聞き、生徒の市民的パフォーマンスの高まりが期待できる。

### (3) 単元の概要

本単元は、武士の支配が広がった11世紀から13世紀頃の中世の日本を取り扱う。平安時代の中頃、我が国は貴族を中心とする政治が行われていた。貴族は広い領地を所有するが、そうした貴族の領地を守る警護の役目から武士が誕生する。また、地方の豪族は新しい土地を開墾し農地を増やしていたが、朝廷からの徴税のため、名目上貴族や神社、寺へ寄進した。当時は貨幣経済がまだ浸透しておらず、生活に必要なものは物々交換で得ており、所有する土地からとれる農産物や特産物は、生きる上で欠かせないものであった。そのため、土地を持つということが大変重要なことであり、地方豪族は自分たちの土地を奪われないよう武器を持って戦うようになる。やがて彼らは皇族を中心にまとまり、武士団が形成される。その後、源頼朝は主君と主従関係を結んだ御家人に、その領地を認めたり恩賞として土地を与えたりする封建制度を確立し、鎌倉幕府が成立することとなる。しかし、土地はその一族で分割相続されるため後々武士の生活は困窮していく。さらに元寇後は、幕府は御家人へ恩賞を与えることが難しく、武士の生活は困窮し、徳政令を出すに至る。当時、貧困と生活苦から子どもの間引きが行われていたことも、数少ない資料からではあるが推察されている。

さて、平成25年6月に「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が成立した。この法律は子どもの将来がその生まれ育った環境によって左右されることのないよう、貧困の状況にある子どもが健やかに育成される環境を整備するとともに、教育の機会均等を図ることを目的としている。国民生活基礎調査によれば、平均的な所得の半分に満たない家庭で暮らす18歳未満の割合（厚生労働省はこれを「子どもの貧困率」と定義している）は平成24年の時点で全国16.3%と、全国の子どもの6人に1人が貧困状態にある。佐賀県内では子育て世帯の11.3%が貧困状態にあるとされ、その拡大が懸念されている。こうした実態を受けて、「佐賀県子どもの貧困対策推進計画」が平成28年3月に策定された。子どもがお金の不安を感じることなく安心して成長できる環境づくりをめざし、教育・生活・保護者の就労・経済の四つを柱に、具体的な施策の実施が急務となっている。このように、現代社会では子どもの貧困が大きくクローズアップされている。その背景として、子どもの権

利条約の批准など、子どもの権利を保障すべきという世論が高まってきていることが考えられる。

中世の人々の子どもの捉え方と現代のそれは、大きく異なる。また、中世において「貧困」という言葉や概念は存在しないであろうし、あったとして、現代のそれとは捉え方が大きく異なるであろう。そこで本単元では、中世初期の社会と現代社会を様々な視点から比較することで、社会の仕組みや生活文化の違い等について捉えさせたい。その際、中世初期の社会における「貧しさ」や現代社会における「貧困」が生じる理由を考察させることで、歴史の学び方を習得させたい。歴史から現代社会の在り方を学びつつ、一市民として現実の社会問題について主体的に考え、社会に参画しようとする姿勢を育てたい。

#### (4) 単元の授業過程（全13時間）

表1に単元の授業過程を示す。

表1 単元の授業過程

過程	学習活動と内容	時間	教師の指導・支援	評価とその方法
導入	1 歴史を見る「視点」を設けて、歴史を考察する。	0.5	1 政治形態や女性の立場、貨幣経済など、歴史を見る視点を設けて、中世初期と現代を比較することを理解させる。	
	2 パフォーマンス課題を知る。	0.5	2 課題を説明し「貧困」という視点から日本の現在の状況を確認する。	
	パフォーマンス課題：「日本の子どもの貧困問題を改善するための方策を提案しよう」			
展開	3 武家政権の成立と封建制度のしくみを理解する。	4	3-(1) 武家社会の成立や封建制度に関する資料を読み取り、特色を説明させる。 3-(2) 元軍の襲来による封建制度への影響を説明させる。 3-(3) 当時の社会と現代社会を様々な視点から比較させる。	エ 中世初期の社会と現代社会を比較することで、中世初期の特色や関連性などの概念に関する知識を身に付けている。
	4 課題に対する自分の意見をもつ。	1	4-(1) 現在の日本の子どもの貧困の実態を理解させる。 4-(2) 子どもの貧困問題が生じる理由や貧困が人間に及ぼす影響について調べ、自分の考えをもたせる。 4-(3) グループで意見交換や質疑応答を行い、グループで提案する方策を決定させる。	【ワークシート・観察】 ウ 適切な資料・内容や表現方法を選び、自分の考えを明確に説明したり、相手の考えを理解するために質問したりしている。
	5 討論の準備を行う。	2	5 根拠を明確にした主張になっているか検討させる。	【ワークシート】 ア 一市民として主体的に課題を追究しようとしたり、意欲的に他者と対話しようとしたりしている。
	6 討論を行う。	3 本時 2/3	6-(1) 根拠を明確にし、批判的に議論させる。 6-(2) LPや級友との意見を踏まえて、多面的・多角的に考察させ、修正案を発表させる。	【観察】 イ 中世初期の社会状況と現代のそれを比較した上で、提案を批判的に吟味し、論理的に自分の考えを再構成している。
	7 意見文を作成する。	1	7 LPや友達との議論を踏まえて、自分の考えを見直しまとめさせる。	【意見文】

展望	8 意見文の発表会をする。	1	8 発表において、LPからコメントをいただく。	
----	---------------	---	-------------------------	--

(5) 本時の授業過程 (全11時間 10/13)

表2に本時の授業過程を示す。

表2 本時の授業過程

過程	学習活動と内容	形態	教師の指導・支援	評価とその方法
導入	1 説明を聞き、本時の見通しをもつ。	斉	1 根拠を明確に述べるとともに、よりよいパフォーマンスにするよう意欲づけをする。	
	めあて：「日本の子どもの貧困問題を改善するための方策を提案しよう」			
展開	2 3チームが提案を行う。	G	2 現状分析や主張の根拠、提案の重要性を明確に述べさせる。	
	【各班からの提案】 4班：企業の働き方改革運動 6班：里親制度を広める 9班：寄宿舍学校の設立			
	3 質疑応答を行う。	G	3 それぞれのチームの主張の分りにくい点や、根拠に乏しい点に質問させる。	ア 日本の子どもの貧困問題の改善のための方策について、他者と協調しながら意見交換をしようとしている。 【観察】
	4 全体討論を行う。	斉	4-(1) フロアやLPからの質疑に対して、提案チームに応答させる。議論がかみ合わない点や曖昧な点は司会班に確認をとらせる。論点に沿った議論になるよう司会班に助言する。 4-(2) LPや級友との意見を踏まえて、修正案を再提案させる。	イ 友達やLPとの議論を通して、複数の意見や立場を踏まえ、提案を加えたり修正したりしている。 【観察・ワークシート】
展望	5 本時を振り返る。	個	5 次時の公開討論会に向けて、よりよいパフォーマンスになるように、LPや友達との議論を振り返らせる。	

※ 本授業におけるLPは、佐賀市の子ども食堂でボランティアスタッフとして活動されている先輩市民（古参者）である。単元終了後、LPとの学びを振り返って自分の考えをまとめさせた。

### 3 実践事例の省察

#### (1) 抽出生徒の変容

本時の提案チームの生徒から1名抽出し、抽出生徒Aの変容を次に示す。

資料1は、第10時で提案を担当した6班の生徒Aの授業後の学びのまとめである。第10時で生徒Aは、子どもの貧困問題を改善するための方策として、里親制度を提案した。質疑の時間に、LPから里親制度は親と子どもの関係を切り離してしまうため、食べ物など「経済的な貧困」は解決できても「心の貧困」を生むのではないかと、投げかけられていた。

#### 資料1 抽出生徒Aの記述内容

13時目	(LPの発言について)「心の貧困」という言葉に疑問を感じました。…経済的な貧困は解決できても、心の貧困は解決できないとのことでしたが、 <u>「心の貧困」とは、さみしさや、それを引き起こしたことへの怒りに対して起こるものだと思います。ですから、私は里親制度を使うことで、どこか心のかたすみにあるそれらを取り除くことができるのではないかと思います</u> が・・・
------	---

生徒Aの「心の貧困とは、さみしさやそれを引き起こしたことへの怒りに対して起こるもの」という表記は、親も貧困であるため、一日中仕事に従事していて親と関わったりすることができなかったり、親からネグレクトを受けたりする場合を想像している。つまり、実の親から育てられているとしても、心の貧困が生じることもある、と述べたいのであろう。「里親制度を使うことで、どこか心のかたすみにあるそれらを取り除くことができる」という記述は、里親制度は貧困に悩む親子の心をケアすることができるということをも表しているのであろう。

しかしながら、生徒Aをはじめとして、「心の貧困」という言葉は多くの生徒にとって印象的であったことが生徒の記述から伺えた。ほとんどの生徒が「経済的貧困」の解決に視点が集まっており、LPの発言を通して心の貧困の救済をも考えた方策を考えねばならないということに初めて気づかされたのである。

この、「心の貧困」という新たな視点は、LPが実際にボランティア活動を通して気付いたことであり、生徒だけの学びでは得られなかったものである。LPは、「子どもの貧困を救うといっても、その解決方法として、これ、というものはないと思います。それに、おなかが満たされたからといって、親が家にいなくてひとりぼっちであつたら、子どもはすこやかに成長できないですよ。心が貧しくならないように、私たちができることは、話をしたりして、寄り添うこと」と述べた。

#### (2) LPの変容

4班は子どもの貧困問題を改善するための方策として、「企業の働き方改革」を提案した。4班の主張の内容は、労働条件や就業環境が劣悪で、従業員に過重な負担を強いる、いわゆる「ブラック企業」をなくす啓発運動を進めることである。提案の理由として、過重なノルマや長時間サービス労働を課し、組織の利益を優先する「使い捨て」の雇用形態が実態としてあり、それこそが問題の根本であると考えたのだ。資料2は、LPの第10時の議論参加後の感想である。

#### 資料2 LPの発言内容

質問者	今回学生の授業に参加されてみてどう感じましたか。
LP	そうですね、子ども食堂というのはまず最初このお話を聞いたときに、 <u>子どもが子どもの貧困について考えることの難しさというのをわかっていらっしゃるのかなと感じました。とても難しい問題だなと思いました。</u> やっついて、やはり、子ども食堂という



のは社会の問題でありますし、子どもたちに何か、えっと、貧困だから何か集めて寄付をしましょうとか、そういうふうなアフリカの難民の子どもたちの貧困とはまた違う意味合いがありますし、とても難しい授業だなと思いました。

質問者 最後（優れていた提案を）4番チームに決めた理由は何ですか。

LP 実際問題私がこの活動をするにあたってずっと、いろんな提供活動をしてきて、大人の提供も子どもの提供もするようになって、実際問題子どもの貧困、子どもの声を聞いて、そして、やはり子ども食堂というものを大切だということを感じてやったので、その根底には、先ほども言いましたように、子ども白書では一人親家庭、離婚率の高さからくる一人親家庭の増加、それによる収入の不安定、正規雇用、不正規雇用っていうのがすごく大きく子供の貧困に直結するというデータもでていきますし、ですから、4班さんですか、よくついでいらっしゃるなと思いました。

資料2のLPの「子どもが子どもの貧困について…（中略）…ました。とても難しい問題だなと思いました。」という発言は、古参者としてあるいは専門家としての立場から、「生徒にはまだこの問題について考えることは早い」という思いが感じられる。では、どの段階になったら生徒はこの問題について考えることができるのだろうか。子どもであっても、子どもならではの見方で現在の社会状況を捉え、共同体を維持・発展させていくという意識をもつことはできるのではないだろうか。

続いて、LPは「子ども白書では…（中略）…非正規雇用っていうのがすごく大きく子供の貧困に直結するというデータもでていきますし、ですから、4班さんですか、よくついでいらっしゃるなと思いました。」と述べた。「子どもたちを救うために何か集めましょう」といった支援が提案されると思っていたLPだったが、子どもではあれども、問題の根本とも考えられる事実を鋭く見抜いた新参者の様子を目の当たりにし、共に社会の在り方について考えるに値する存在だと認識したと思われる。

前述したように、ラーニング・パートナー（LP）は、生徒に知識を「教える」「伝える」という従来のゲスト・ティーチャー（GT）とは意味合いが大きく異なる。新参者と古参者という異なる立場ではあるが、市民として共同体を維持・発展させていくというパートナーである。授業後、子ども食堂について調べていた生徒はLPに質問をしていた。これからを担う一市民として、生徒は今後の社会の在り方について考えたことを述べようとする意欲を高めることにつながったと考える。

## 4 成果と課題

### (1) 成果

- ① 学校という域を超えたラーニング・パートナーを活用することができた。

古参者と新参者がともに学び合い共同体を維持・発展させるという正統的周辺参加論にもとづいた授業を実践するにあたり、共同体の古参者との対話を授業に組み込んだ。昨年度は、佐賀大学の関係者をLPとしたが、今回は市民社会とのアクセスを広げ、学校と外部の共同体とのネットワークを図ることができた。

- ② ラーニング・パートナーの活用により、生徒の市民的パフォーマンスの高まりが見られた。

生徒は古参者市民から知見を得たことにより、生徒同士あるいは生徒と教師の学びのみでは得られなかったであろう部分に思いをめぐらせたり、新たな疑問に気づくことができたりした。さらに、社会問題について、今後も市民社会にアクセスしながら考え続けていく意思を示すといった記述から、限られた事例ではあるが正統的周辺参加の可能性を見出すことができた。

### (2) 課題

- ・外部の共同体とのネットワークづくり

- ・LPを効果的に活用する授業構成
- ・LPとの授業実践とその効果の検証の継続

### 【参考文献】

- 国立教育政策研究所 2015 『資質能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書1 ～使って育てて21世紀を生き抜くための資質・能力～』
- 佐賀大学文化教育学部附属中学校 2014 『研究紀要第3号』
- 佐長健司 2016 「社会改革へ向かう学習を求めて：正統的周辺参加における拡張による学習」 佐賀大学教育学部『研究論文集』第1集第1号, pp.117\_131
- ジーン・レイヴ, エティエンヌ・ウエンガー 1993 『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』(訳・佐伯胖) 産業図書
- ユーリア・エンゲストローム 2007 『拡張による学習 ―活動理論からのアプローチ』(訳・山住勝弘 他) 新曜社